

三月十六日

五時四十分起床。昨日は忙しかった。結局仕事の区切りとネパール行の準備を終えたのが朝の三時過。家内と朝お茶を飲み、新宿発七時七分のナリタエクスプレスに乗っている。今日はバンコク迄だから比較的楽だな。タイ航空十一時過離陸。成田からの参加者は十五、六名で、何人かが時間にルーズなので、バンコクで注意しなくてはなるまい。一昨日沖縄からの帰路を又、飛んでいるわけで、マアこの無意味さを何とか意味ある事に変えたいとは思ふ。隣席では写真家の中里和人が眠っている。私も昨夜はほとんど眠っていないので、この人も相当無理してこの旅の時間を作ったのだろう事が知れる。カトマンドウ盆地のパシユパティナー、マザーテレサの家の、菜園は取材対象としたら良いモノになるだろうが、カトマンドウ周辺でもう二、三件欲しいね。機中でデヴィド・ハーヴェイのポストモダンテイの条件を遅ればせながら読む。この二週間で読了するつもりで持って出たが、次女の友美から黙って持ち出すなと怒鳴られる始末で（実はこれは娘の本）誠に面目ない。長女からもお父さんこれ位の本は読んどきなさいよと忠告されているのだから、誠に恐怖である。四十五ページ読んで頭が痛くなって休む。アト一時間位でバンコクか。十五時四〇分バンコク着。荷物をカトマンドウまで送ってしまった者がいて手間どり、ホテル着は十八時過。中里氏とヤワラーに食事に出る。オリエンタル・ホテルのテラスでドライマティーニをや

って、チャオプラヤの風に吹かれ二十三時前ホテル着。すぐ休む。

三月十七日

朝六時過目ざめる。中里氏とは雑誌の連載の取材を兼ねて来ているのだが、ネパールでマザーテレサの家以外に良い対象が見えるだろうか。空が白々と明けてきた。あんまり気持の良い部屋じゃないのでシャワーを浴びてロビーに降りたら、まだ六時過だった。部屋のデジタル時計が一時間すすんでいたのだ。時計を持たぬとこういう事があるんだ。食事迄あと一時間皆を待たねばならんな。ホテルには非常にはつきりとした階層性の表現があるな。こんな空港の乗継客用のホテルだつてそれが表れている。泊っている客の仕草や服装もそうだ。タイはアジアでは植民地体験のない珍しい国だが、周囲は皆ヨーロッパの植民地だった。だからヨーロッパの旅行者が多い。アメリカ人よりも。それがオリエンタル・ホテルを世界一のホテルに育てあげた。あのホテルはヨーロッパのアジア・イメージの集積地なのだ。このホテルにはオリエンタルの優雅さはない。しかし、オリエンタル・ホテルとは違ったミドルクラスのたくましさ、ふてぶてしさがある。大きいヨーロッパの女性が自分の身の丈程もある荷物をいくつも一人で運び積み上げている仕草もテキパキとして気持が良い。誰か助けてくれるだろう等の甘えも、期待もおくびにも出していない。十一時過バンコク空港離陸。カトマンドウに向けて飛行中。二十数名のグループを松本に引率させる積りだった。でも二日間見ている仲々大変なのが知れた。彼も東南アジアは初めてなので無理もないが、でもこれ位の集団を統率する才に欠けるところがあるな。これは事務所運営と同じで先を読んで動かなくてはならないのだ。この人数をネパール・カンボジアを無事に過ごさせるのは

結構大変なのだよ。ベンガル湾の上空でいつも揺れるな。カトマンドウ空港着十三時過。ジュニー、小笠原、シュレスタ教授、トリバン大学の女学生ジータが出迎えてくれた。バス・ジープでカトマンドウ市内へ。ネパールは旧正月当日で、市内は顔を真赤に塗りたくった人々で溢れている。水かけも自由で無礼自在の一日らしい。赤い顔ばかりではなく、銀色に塗ったのもいるし、黒や紫もいて面白い。ジュニーのオフイスで顔なじみになったスタッフと面会。ジュニー、小笠原、シュレスタ教授を皆に紹介する。赤い水をかけられるからと、タクシーに分乗させたのが悪かった。一組四人が行方不明になるが、一時間程して帰ってきた。聞けば空港まで連れていかれたそう。マ、戻れて良かった。そんなこんなで予定より遅れてキルティプールの宿舎へ着いたのが十七時頃。宿舎のロケーションは素晴しかった。千六百米位の高度にあり、はるかカトマンドウ盆地を眼下に一望できる。キルティプールの丘も下に見える。建物は四棟に分かれ、ネパールの伝統的な作りで、ブラフマ階層が住んでいるらしい。内部は土の塗り廻し。テントも数張り用意されていて心使いが嬉しい。テントに若い学生を寝かせ、部屋割をして夕食。この宿舎のオーナーはカトマンドウで出版社も経営している実力者らしい。キルティプールの計らいでこのようなベストな場所が選ばれたようだ。昨年の挨拶まわりのお蔭だ。夕食は素敵なダルカレーでしたつづみを打った。皆も嬉しそうで良かった。九時過たき火の火も弱くなったので寝る。今日は満月の日でもあった。終わり良ければ全てよし。

三月十八日

朝四時過起床。昨日のメモを記す。夜はまだ明けず、カトマンドウ盆地の灯が銀河のように下に見える。ジュニー、キルティプ

ールの人々に感謝する。そう言えばキルティプールのスタッフにも昨夜面会できて、又歌も飛び出し、おまけに宿舎のオーナーは踊り出すし、ネパリアンの純朴さを見せつけられた。日本人はこういうモノを失ってしまったんだよね。そんなこと考えている間もなく、今日の仕事の割振りを考えなければいけない。只今五時空は白々ともしていない。先程トイレに行つたが、こんな高地で水洗なんだから、皆感謝しろつての。六時夜が明けてきた。ヒマラヤが壮大に、余りにも壮大に見える。コレワ、何と、マア良かった。トースト・バター・ジャム・卵・ティー・バナナ・ポテトの朝食を終え、キルティプールの丘へ出発。車で二十分位。途中の村の姿が好ましい。午前中は各自、自由に歩かせる。北東端のテンプルでカトマンドウ盆地について小レクチャー。十時半より、昨夜割り当てた女性の生活、子供の遊び、水場の生活、樹木と場所、描かれているモノ、ポスター、貼り紙、生産しているモノ、売られているモノのテーマに即して調査を開始する。中里氏と集落を歩き、セルビルドの取材。余りにも多くの建設の現場があるのに驚く。昼食はバク・バイラブ寺院で。東北の塔はウマ・マヘシユール寺院、南西のストウーパはチランデオ・ストウーパ。中央の低部は旧王宮がある。十三時キルティプールのミニシイパリティオフイス訪問。新しいボスに挨拶。皆のアイデンティティ・カードを受け取る。これには少々手間取つたが、仕方ない。その後中里氏と取材。石工のラム・クシユリナ・バンダリ（四十二才）をウマ・マヘシユール寺院下に訪ねる。一米二百の長さのヴィシユヌ神を彫っていた。一万八千ルピー程のものでパブリックな仕事だそう。彼の家を訪問、父も有名なペインターで名をワイル・マン・シンフォン・バンダリと言う。その作品が寝室に飾ってあり、面白かった。オヤジさんの本と彼の作品

の小さなカタログをいただく。少しキルティプールのの中に入れたかな。午後遅く、キルティプール・エリア内唯一のレンガ工場を取材。日干しレンガを少し石炭ボイラーで焼く製法の工場だった。レンガ工が何故か飲んで、踊り狂っていたのが印象的。七年前にオープンしたファクトリーで大きな規模のモノだった。一日の生産量が四千二〇〇個程らしい。ほとんど人力で作っていて、日干しレンガを頭からのベルトに吊って運んでいる姿や、レンガ作りの現場に子供が放り出されているのを見ると、痛々しかった。キルティプールの建設の中核だな、このレンガ工場は。十六時半頃バク・バイラブ寺院前のバスに戻る。小雨降る。十七時半全員の調査修了。宿舎に戻る。充実した一日だった。夕食前に、宿舎の土壁に調査した記録を貼らせ、プレゼンテーション。一日の仕事でも能力差が出るな。四組のプレゼンテーションをクリティークする。トリバン大学のシュレスタ教授、宿舎のオーナーのマドハブ・エル・マハジャン氏も同席。マハジャン氏は五〇〇名の小学生を持つ学校のチェアーマンでもあり、カトマンドウ市のマンダラ・ブック・ポイントの経営者でもあり、地域の有力者らしい。活達人人で、このタイプの間は何をやらせても成功するだろう。彼から全員にギフト・Tシャツ。食事は再びダル・カレー。美味である。自家製のアルコールをいただく。シュレスタ教授からもいただく。二十一時学生を寝かせ、私も二十二時過に休む。良い一日だった。

三月十九日

なんと朝三時に眼ざめてしまう。隣の部屋のマハジャン氏か屋根裏部屋の小笠原氏かの凄いいびきが響き渡っている。昨日のメモを小一時間程記し、トイレに行って今四時。今日は五時起床な

のであと一時間努力して眠ることにしよう。このワークシヨップは学生にとっては良い体験になるだろう事を信じていたい。五時半出発。六時キルティプール・バク・バイラブ寺院。町中がお参りの人で一杯。女性は左手に金属の小皿を持ち、それに乗せた水、赤黄色の塗料、米を、神々の像や地面に彫られたハスの花だるうかに塗り、供えて寺院中、それこそ町中を供えて巡っている。その人々の動きと供に町中を歩く。北と南の二ヶ所には御詠歌をこれは男だけが唄っている。ありとあらゆるヒンドゥー教の神像はこうして赤く塗りたくられていく。日本の仏像の清々しさと比較すると、その混濁振りが対比的である。仏教とヒンドゥー教の違いか、神道とインド哲学の違いなのか知りたいところだ。現世容認と現世否定、あるいは逃避のちがいがいかな。花の使い方も日本とは違う。日本ではクキと花と共に供えるが、ヒンドゥーでは花ピラだけ。何故だろうか。バグ・バイラブ寺院に戻ってテンプルの隣の二十人程オジさんばかり集って鳴物入りで御詠歌を唄っているところをのぞいていたら、入れという。入ると、上れと言う。言われるままに上り込み、すすめられるままに席を与えられ、御詠歌の仲間入り。二つの木片のスイカの小片状になったモノを与えられ、それを打ちつけて、御詠歌のリズムセクションを担当してしまう。皆、和やかに目くばせして、排除の風は一切ない。これもヒンドゥー教の根本なのか。何でも受け入れて、キレイに整理しようとはしない。四十分程仲間入りし、煙草までいただき、すっかり気持ちやが和やかになってしまふ。彼等ネワリーにとってこれは一種の日々のコミュニケーショ手段なのが知れる。宗教はコミュニケーションの便法でもあるらしい。八時半バスで宿舎に。九時着。腹がへって、朝食がうまい。午前中は休息とする。一階の土間のテラスで眠る。陽光が気持ち良い。昼食後再びキルテ

イプールへ。夕方までWORK。個人差が出始める。新参加者加入。夕方は寒い。夕食前に今日の仕事のプレゼンテーション。ネパールの女性の生活組のオバさん達の仕事が良い。他に二、三マアマアの仕事があるが、低学年の学生のモノはダメ。基本的にエネルギー不足だ。プレゼンテーションは英語と日本語をミックスさせた。ネパリアンが聞いているから。言葉の壁は日本人学生には大きい。クリティクを一時間程、その後ネパールのシンガーショングライターらしきオジさん二人組が現れて唄とおどりになる。私のクリティクは学生に届いているかどうかは知らない。しかし、させている仕事の水準を下げなければならぬコレワ。二十三時寝る。今日は疲れた。

三月二〇日

東京を出てから五日目の朝。二ヶ国を巡るワークショップは相当キツイだろうとは思ってはいたが、ネパールから始めて良かった。人それぞれの思惑はあるだろうが基本的にはネパールの不思議な知識階級の人々や、現場の人々の好意で無事にやっている。昨夜は久しぶりに七時間ぶつ通しで休むことができた。今日は中里氏とマザーテレサの家に行く。ストウーパを修復している現場があれば良いのだが。小笠原さん飲み過ぎで起きてこない。色んなストレスがあるんだろうな。六時に起きて中庭でボーツとしていた。朝の冷気が気持ち良い。富士市から参加している鈴木さん（六十六才）はブノンペンのレンガ積みを入れたら三回目参加で、今日はパシユパティナートへさそってみようか。朝のテラスから眺めるキルティプールは美しく平和な風景だが、ここで一生を送る人の日々の生活は僕には想像もつかない。

九月のワークショップのアウトラインをイメージし始めなくて

はならないね。只今七時半。キルティプールはうすいモヤに包まれたままだ。昨日ダウンした学生と話す。やはり精神的ショックで参っていたようだ。それでいいんですよ、ショックを受けるためにここまで来ているのだから。カトマンドウ盆地に来て初日だけだなヒマラヤを遠望できたのは。キルティプール計画は第一段階で先ず参加者の数を増やす事から始めなければなるまい。その方法を考えよう。しかし、ここまで来てそんな事考えてる自分にホトホトあきれよ。朝食をすませ学生達は今日もキルティプールの丘へ。石山中里鈴木ジュニーはカトマンドウへ。建設中のストウーパの現場位置をジュニーに教えてもらい、パシユパティナートへ。ミニストリー・オブ・ウーマン・チルドレン・ソーシャル・ウェルフェア・センター、通称マザーテレサ死を待つ人家の取材。昨年来た時に裏の庭園が気になっていたので、花の咲く今を狙ってやってきた。今は二百五人の人がここで暮らしている開設されたのは一九八一年。それからマザーテレサの参加があったと言うが、私が初めて訪ねた頃はオフィスシャルな開設前で、その時はマザーテレサの家と呼ばれていた。裏庭は住人、つまり死を待つ人の手になるもので、それを再び見たかった。一階の居住スペースを全て巡り、二階も全て見た。凄絶としか言い様の無いスペースであった。闇と光、生と死が隣り合わせの場所である。写真をとるのにも勇気がいる。しかし住人は皆とは言えぬがフレンドリーで明るい。どうした事か、終の住処である事は確かなのに。室内の暗さと、庭の光とが凄味のあるコントラスト。自炊をする人がいるのだろう。最小限のキッチン、といってもナベ・コップ・コンロ位なのだが床に並べている人間もいた。食事後ストウーパ・リノベーションの現場へ。名をダンドウ・サイ・デ・ストウーパ・リノベーション。オフィスの人の言では謂われは二

千三〇〇年前アシヨカ王の頃からの事だと言う。本当かね。サンチーのインド最古のストウーパとはスタイルが大部ちがうが、小さなゲートの形だけはサンチーのモノに似ていた。周辺の小ストウーパ群の方が古い様な気もする。N・B・L・a・M・a・カナンパニーの仕事。ネワール族のコミュニティーをラマ&セルバイン・ヨールモが支援して建設しているようだ。現場に沢山の女性が土まみれになって働いていたのが印象的だった。中里・鈴木両氏のためにボドナーハのテンブル（目玉寺）に行く。十六時半キルティプールの宿舎に帰る。ここはカトマンドウと比べて静かで平安だ。十八時頃、学生達チャーターしているバスで帰る。すぐにプレゼンテーション。今日のWORKは皆良かった。具体的なモノに触らせるのが良いのだな。特に早稲田の二七才の学生と日本女子大の三年生の仕事が光っていた。共に女性である。それよりも驚いたのは子供の遊びをキチンと追いつけた二人組（これは男性）とオバさん二人プラス商学部の女学生が入ったチームの女性の生活を追ったモノ。これも従来サーヴェイの域をこえていてまことに良かった。食後、キルティプール、ミニシパリテイオフィスの二人、すでに顔なじみになった、とオーナーが我々全員にネワール族の名前をつけてくれた。彼等は本当に楽しそうにやってくれて、二十二名全員にネワールの名がつけられた。ちなみに私につけられた名前がキルティプール・バルバブ。私も彼等に名前をつけ返してやった。統一郎、ツヨシ、賢、笑太郎等。二三時前休む。

三月二二日

昨夜もよく眠れた。五時に起きて、メモを記す。今日もヒマラヤは見えない。清水さんキルティプールまで歩いてゆくと言う。昨夜の彼の仕事に対するクリティークがこたえたのだろう。大人

の意地だね。朝食後学生は自由行動。大半が観光。石山中鈴木おばさん二人、加藤は車でジュニーのオフィスへ。シュレスタと会う。ボドナーハ、バクタプール、その他へのツアー。疲れた。十九時半宿舎へ帰る。小笠原さん予想通り泥酔していて、明日のカンボジア行はおぼつかない。チャンゲナラカン、バクタプールへのツアーは私にはマアそれ程必要なものではなかった。九時学生達キルティプールへ。石山中里小笠原ジュニーのオフィスへ。今日は土曜日でロイヤル・ネパール航空のオフィスはクローズ。小笠原氏の明日のフライトも怪しいなコレは。ジュニーと国連スタッフに会う。昼前宿舎のロッジに戻り、シャワー、洗濯。のんびりとした時を過ごす。ブラマー（僧）階級が使用していたと言う、この民家の周辺を歩く。写真をとる。秋のワークショップの宿舎はここで良いのか考えなくては。カトマンドウ市内の宿舎はあり得ないだろうけれど。このキルティプール・ワークショップは私の命取りになるか、ジャンピングボードになるか、どちらかだな。キルティプールの手織りのクロスその他を日本で売る事は出来ないか。日本サイドでデザインして、キルティプールで織るとか。夕方学生達に新しい課題を出す。「考える家」学生達はサーヴェイは良くやっている。又、地元の人々にも良くとけ込んでいるようだ。そりゃさうだろう家の中に入り込んで図面をとっているんだから。夜、オーナーの兄貴及びトリバン大学のシュレスタ教授、ジータ来。私は九時頃寝てしまった。疲れがたまっている。

三月二三日

今日は実質的にネパール最終日。朝サーヴェイ。及び設計ワーク。午後三時よりプレゼンテーション及びクリティーク。今のところ予想以上の成果が上がっている。五時目覚めて、昨日のメモ

一二時修了。休む。

を記し、ゆっくりと夜明けを待つ。今日もヒマラヤは見えぬだろうが、雲の中に姿を見せぬ、その姿は視えている。ネパールに何度も来ている者の特権である。朝食後キルティプールへ。スケッチ2枚。一人でゆっくり歩き、見る。南のストウパーには誰もいない。風がそよそよ吹いている。敦煌空港の風を思い出す。バク・バウ寺院境内で休む。三層の楼の最上階の屋根にメタルの鳥がとまっているのに気付いた。何時の時代にも何処にもアーティストはいるのだな。十二時キルティプールに別れを告げ宿舎へ。十二時二〇分着。今日は暑い位だ。雨季に近付いているのだろう。キルティプール・ワークショップは教育的には充二分すぎる成果を上げたと思う。秋のワークショップのプログラムもイメージでできるようになった。その他のより実質的な事のイメージは今日のファイナル・プレゼンテーションの五時間の内に、何かをつかんでしまいたい。すでに大体のイメージは生まれかかっているだけけれど、それを順序だてて行く必要がある。木田元（哲学者）が哲学の役割とは急速に進んでいくこととする文明に、このままでは危ないから少しブレーキをかける、もう少しゆっくり行こうと声を掛ける事だと言っていたらしい。キルティプールに、そしてネパールから学ぶべき事もそう言う事だろうとは思う。もしかしたら、日本の近代化には、もう一つの径があったのではないかと、悔やんでみる事でもあろう。十五時ファイナル・プレゼンテーション開始。おばさんチームと子供の遊びをリサーチしていたチームの仕事が質量共に群を抜いていた。しかし、総体的にサーヴェイのエネルギーは見るべきものがあつた。これをどうまとめようか、ブロンペンで考えよう。加藤が使えるそうなので彼女をまとめの中心にするか、おばさんに声を掛けてみようか、思案のしどころだな。晩飯はクリティークが全て終わった二〇時から。二十